

# 自閉症の児童に対して、タブレット型端末等を活用し、ことばの発音をはじめとした学習支援を行った事例

## 1. 事例の概要

A児は小学校1年生で、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している。視線が合わないことが多く、音などにより気が散ってしまい、集中できる時間が短い。こだわりが強く、気になることがあると他のことが手に付かなくなることもある。学習面では、足し算や引き算の計算は指を使って計算している。また、ことばの発音面では、サ行がはっきりと発音できない面がある。このことから、繰り上がり繰り下がり計算や、サ行の発音の学習に関して、タブレット型端末を使って、算数では数を確認したり、発音練習では口の動かし方を確認したりしながら指導している。また、注意の集中や持続が困難であることから、15分程度で内容を変えて指導している。

このことにより、サ行の発音はゆっくりと話せば聞き取れるようになった。タブレット型端末にも慣れて、自分のペースで学習課題に取り組めるようになってきた。

**キーワード** 自閉症、タブレット型端末、パソコン、電子黒板

## 2. 児童の実態

A児はB市立C小学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する1年生である。視線が合わないことが多く、また、音などにより気が散ってしまう。話をしても話題が次々と変わり、同じ事に集中できる時間は短い。こだわりが強く、気になることがあると他のことが手に付かなくなることもある。さらに、予定を事前に知らせて、見通しをもたせないとパニック状態になることがある。休み時間が短くなることを嫌い、授業が延びてしまうと指示などが聞けなくなる。食事面は偏食傾向が強いが、入学時と比べると食べられるものが増えてきている。学習に集中できる時間は短いため、15分単位で内容や指導方法を変えている。算数において、足し算や引き算は指を使って計算できる。また、ことばの発音面では、サ行がはっきりと発音できない。

## 3. 本事例に関する基礎的環境整備

- B市では「専門家チーム」があり、巡回や相談を行う仕組みがある。【基礎2】
- B市では早期からの相談体制の一環として、個別のライフサポートファイルを作成している。また、特別支援学校の特別支援教育コーディネーターの巡回や相談の際には、個別の指導計画作成の助言を受けている。【基礎3】
- 電子黒板を配置し、活用をしている。タブレット型端末とつなぐことによって、見やすく学びやすい資料を提示している。また、校内無線LANが整備され、ネットワーク環境が整っている。【基礎5】
- C小学校では特別支援学級介助員3名と通常の学級指導員2名を配置し、学級担任と連携を図りながら、よりきめ細かな指導・支援を心がけている。【基礎6】

## 4. 合意形成のプロセス

A児は市の子ども発達センターにて指導を受けており、入学前の就学指導により、特別支援学級への入級が決まった。発音面の課題に対して指導を行うことや個別の指導計画に

関すること、指導の内容を毎日連絡帳で報告することについて保護者と面談し合意を得た。

## 5. 合理的配慮の実際

- 学習意欲を継続させるために、国語科や算数科においてはICT機器を活用して、操作活動を取り入れた。【合理①-1-1】
- タブレット型端末を使い、ひらがなの書き順から指導した。できるようになったら、紙に書いて練習をした。書く作業を必ず取り入れるようにした。【合理①-1-2】
- 書くことのみでの学習ではすぐに飽きてしまうので、タブレット型端末を活用して説明をした後（写真1）で、ノートに書かせる（写真2）ようにした。【合理①-2-1】



写真1 タブレット端末を活用した書き順の指導 写真2 ひらがなをノートに書く練習

- 発音に関する指導では、視覚的に分かりやすくするために、まず鏡やタブレット型端末を用い、口や舌の動かし方を見せた。【合理①-1-2】
- 他の児童との接触によってストレスがたまらないように、別の場で活動できる機会を設けた。【合理①-2-3】
- A児がタブレット型端末操作の面で学習が中断しないように、ICT活用支援員が、必要に応じて支援に入り、対応できるようにした。【合理②-1】
- 学習生活の予定や生活のめあてなどの資料を教室で示す場合、文字の大きさや色を視認しやすいものにし、また、年間を通して同じ場所に一定の形式で表示するようにした。【合理③-1】
- 集中できるようにするために、より黒板に近い場所に机を置き、視界から入る情報量をより少なくなるようにした。また、必要に応じて個室を使い、静かな環境で学習できるようにも配慮した。【合理③-2】

## 6. 本事例の成果と課題

教室環境やICT機器の環境、教育内容の工夫等により、時間的・空間的なゆとりをもたせるようにしたことで、学習や生活に対する不安が軽減され、自分のペースで活動することができるようになった。また、発音面は入学当初よりもサ行をゆっくりと話せば聞き取れるようになった。タブレット型端末にも慣れて、自分のペースで学習課題に取り組めるようになってきた。関係機関等の支援や協力を得られたことは、A児の学力や生活力の向上にとって大きな力となった。

課題としては、教育的な効果を高めるために、A児がタブレット型端末を必要に応じて活用できるように整備していく必要がある。また、個別指導を行うための校内支援体制が必要であり、それにともなった人員の確保も必要である。